茅盾の作家としての出發點

平松辰雄

一

現代中國の作家・文學を考えるには、その作家・作品を靜的にとらえることでは、決してそれらを全體的に位置づけ明らかにさせることはできない。このことは現代中國の作家のみに限らず、どの國のいつの時代の作家についても言えることだろうが、特に中國のように古い社會がおそくまであつて、それが對外的・對内的な激しい矛盾の中で短時日の間に急速な變貌を遂げていつた社會における作家・作品については、時代の作家に與える影響と、その作品への反映という點を充分に考えにいれてみなければならない。つまり何よりも客觀的な狀況の中で作家をとらえ、作品を考えてゆくという原則をきびしく守つてゆかなくては、作家の實際像を正しくつかむことも、作品のもつ意味を解明することもできないと思う。茅盾と彼の作品について以上の觀點から研究すると、一見一つの手法のみで通しているやに言われている彼の文學も大きく變化してきていることがわかる。もちろん、作家にはそれぞれの個性・特質があり、その作品にも獨特の味わいがあるものである。つまり、老舍に「子夜」は書けなかつたし、茅盾に「駱駝祥子」は書けなかつた。それは老舍の作品は老舍の作品らしく、北京の街をすみからすみまで熟知していることが作品にでているし、いわゆるユーモアが作品に現われているし、茅盾の作品は茅盾の作品らしく、自分の主觀的世界を一應つきはなして、中國社會の現狀をよく見つめようという意識が大きく作用しているからである。こうした作家の特質・作品の特徴、および手法の研究は、更に追求さるべき問題である。

しかし從來茅盾の文學についての發言では、彼の變化の側面、つまり茅盾の思想的變化とそれを支える歴史情勢までを含めた文學を究明しようとしたものが、日本の研究では少なく、むしろ茅盾の手法論のみを云々していたように思う。わたくしは主に茅盾を變化の側面から追求することに力點を置くことによつて、彼の文學を考えたい。

茅盾が現代中國の文學・文化部門で果たした貢獻は、はなはだ大きい。初期のヨーロッパ、ロシア・ソビエト文學の啓蒙的紹介、批評活動、小說作家として、又左連における文藝理論家として活動、解放後の作家協會主席、文化部長などの行政部面における活動と多方面にわたつている。ここでは彼の全期を全面的にとり上げることはできないから、商務印書館での外國文學の紹介と批評活動とをやめ、革命の實踐の中からつかんだもののうえに小說「蝕」三部作「幻滅」「動搖」「追求」を書いた時期の茅盾にスポットをあてて彼のどのような文學がどのように出發したのかを明らかにしたい。

二

一九二五年という年は、茅盾にとつて一つの大きな轉換をもたらした年であつた。

この年五月には上海を中心にした勞働運動が高揚し、五卅事件が起こつて廣汎な勞働者を卷きこんだが、茅盾がこの大衆鬪爭に大きな關心をよせていたことは、「五月三十日の午後」という題の文章によつて知られる。この中で、デモなどしないで平和な方法で意志を表わすべきだという人々に對しては、「むこうから平和な態度でやつてこないのに、こちらにどんな方法があるのだ?」と反駁し、素手の民衆がもうすでに發砲されて傷ついたからには、「眼には眼を、齒には齒を!」でたちむかわなくてはならぬと怒りを述べている。この民衆の虐殺に對する茅盾の怒りのことばは、明くる二六年三月十八日、北京で同じく徒手空拳の請願者が軍閥政府によつて四、五十名殺された時、魯迅が「血債は必ず同一物で償滿されなければならない」と書いたのと何とよく似ていることか。

だが反面この文章には茅盾の當時の限界もみられる。それは、一般大衆は今さつき起こつたこの大事件を全く忘れてしまつたか、又は知らなかつたかのように平然と生活していると不滿を述べている點にあらわれている。大衆が當然怒るべ

き事態に怒りを爆發させることができないように飼い慣らされている現狀までを深く把えることができず、ただいらだつた氣分を投げつけているが、これはこの當時の茅盾の思想の限界であつた。しかしながら五四運動の時期に示した彼の反應に比べると、これは大きな變化であつた。そしてさらにこの年の八月には勤務先の商務印書館で賃銀ひき上げ要求の鬪爭が行なわれ、八月二十二日から二十九日にかけてストライキが行なわれたのだが、茅盾は編譯所組合の代表として、三千人職工組合の代表とともに交渉にあたつている（このストライキは編譯・印刷・發行の各部門が共鬪した最初の鬪爭であり、出版業界の罷業としても最大規模のものであつた）。一方茅盾の年譜をおつてみると、この年の後半以後これまで旺盛に書いてきた外國文學紹介評論の筆がとまつている。このことは彼がもう時間的にもこれに力を注ぐ餘裕がなくなつてきたことを示している。後になつて彼は、「一九二五～二七年の期間、私は當時革命運動指導の核心とかなり接觸し、同時にわたくしの仕事の位置がわたくしに基層組織と大衆との關係をつかませた」（一九五二年開明版〈茅盾選集〉自序）と語つている點からうかがえるように、この年七月に成立した廣東の國民政府に關係し、その仕事をしはじめていたのである。このような社會的實踐の中で茅盾の世界觀は次第に變化しつつあつた。このことは茅盾の當時の主要な活動の場であつた文藝理論の展開の中で、それまでの自然主義の鼓吹の上に新たに階級論に根ざす文學という課題がとり上げられたことによつて示されている。彼は「プロレタリア文藝について」（一九二五年五月―十月〈文學週報〉）の中で、次のように述べている。階級社會にあつては、文學と文學批評には階級性があり、それぞれの階級のために奉仕するものである。ブルジョア支配下の社會では、その文藝に對する選擇はもちろんブルジョアの利益を基準とするものである。藝術が超然と獨立していられるというのは、被支配階級に利する如何なる藝術も發生しないように間接的に妨害するものの言にすぎない、と。又同年「文學者の新使命」（一九二五年九月三十日〈文學週報〉第百九十期）を書いているが、この中で、新文學は被壓迫民族と階級の革命運動のために奉仕すべきであると强調している。「文學は決してたゞの鏡であるだけでなく、羅針盤とならなくてはならない」とも述べている。以上の論點は、マルクス主義文藝の觀點をふまえての發言であること明白である。これらの論文

からみると、茅盾の思想には大きな變化があらわれはじめていることがわかる。だが反面、この彼の理論も、當時の中國の文藝の實際をふまえての發言ではなく、紹介という性質の強いたゞの「理論」にすぎなかつた。從つてこの事から茅盾の思想・文學觀が急轉直下變化したとは言い切れない。

この時期の茅盾の細かい足跡も、不明瞭な點が多いが、彼の自傳からはつきりしているのは、翌年（一二六年）元旦に同行者五人とともに上海から船で廣東に行つたことである。廣東ではその前年にできた合作政府で、中央執行委員會宣傳部の祕書として働いているが、宣傳部の部長が汪精衞であり、部長代理が毛澤東であつたことの中に端的に表われているように、中國の現狀を變革してゆく「革命」という點では統一していたとはいえ、大きな矛盾を内包した組織であつた。茅盾自身の表現によれば、當時の廣東は「一つの爐であり、一つの大きな渦、一つの大きな矛盾であつた！」（一九三三年「いくつかの昔話」）このことばが表わしているように、二七年四月以後の時點において爆發するに至つた矛盾は、廣東の合作政府で、茅盾の周圍で絶えず醸されていただろう。三月二十日になると中山艦事件がおこり、蔣介石による共產黨に對する斷壓によつて若干の混亂が起こつた。彼はこの事件二日後に廣東を離れ上海に歸り、そこで國民通訊社の主編を擔當している。この仕事もなかなか忙がしい仕事であつたと自分で語つている。そして晝間は忙しい編集の仕事をするかたわら夜は中國古代の神話、各國の神話を研究していた。この年の茅盾の主要な活動は、三月以來の宣傳部における仕事とそれ以後の編集の仕事であつた。二六年は二五年にひきつゞいて合作政府での任務という新しい活動の場面で活躍し始めたことが、茅盾の以後の思想を形成してゆく上で大きな地位を占めるものとなつたのである。現代中國の大變革の嵐の中でインテリゲンチアが生きてきた道は、時期の早晩を問わず、次第に革命の嵐の中に入つてゆき、その中で自己を鍛錬し、次第にプロレタリアートの思想に近づき身につけてゆく道であつたといえよう。二十年代の郭沫若も同じようにこの嵐の中できたえていたのだ。

北伐革命が發展してゆく情勢の中で、武漢に政府が移された。茅盾は再び武漢政府に加わつた。今度の武漢もまた「一

つの大きな渦であり大きな矛盾」（一九三三年「いくつかの昔話」）であつたと言つている。彼にはとにかくこう映つたのであつた。今度の任務は北伐軍の戰鬪などを報導する新聞「民國日報」副刊の編集主任であつた。この頃の茅盾は健康にすぐれず、眞夜中の二時にならないと眠られず、晝間は「客にあつたり、政府機關を走り廻つたり、會議を開いたりしなくてはならず」（「いくつかの昔話」）といつた多忙な日々を送つていた。だがこの革命政府も、蔣介石の反共を標榜する方向への轉向によつて、中國の革命情勢が大きく頓挫し、合作政府は事實上崩壞した。

この時以來中國は、武漢を中心とする革命陣營と、蔣介石の南京を中心とする反革命の陣營とに分かれた。その上武漢では夏斗寅の反亂・馬日事變・汪精衞の裏切りと相續き、革命の中心武漢は反革命の根據地となつてしまい、まもなく南京と武漢は合作し、蔣・汪は反革命に合流した。この頃の武漢では、共產黨員と革命分子に對する慘殺はすさまじいものであつたという。茅盾はこうした事態にどう對處したのであろうか。彼は汪精衞が反革命に轉じる段階で武漢を脫出している。この事件を回顧して次のように述べている。「その時あの『大矛盾』が又『爆發』した。私は多くの人が醜さをあらわし、多くの『時代女性』が發狂し、頽廢的になり、悲觀・消沉したのを見た」（「いくつかの昔話」）彼は反動の波がおしよせてくる情況の中で、蔣介石政府の白色恐怖政治の中で武漢から逃げ出し、江西省の廬山にひきこもる。

國共合作政府における自分の活動について、茅盾は自分の口からは何も語つていないが、商務印書館における仕事や指導的文藝批評家という地位を捨てて飛びこんでいつたからには、かなり精力的な活動をしたものと考えられる。しかしこの時點、つまり一九二七年の夏以降の茅盾の行動は、明らかに最も進步的なインテリゲンチアが步んだ道とは別の道であつた。二五年から二七年四月、この時期の彼の思想と行動は、中國の革命の歷史を一步推しすすめる部置にしつかりと立つていたということができよう。二七年四月を境にして中國の革命史も大きく轉回して、新しい段階に進んでいつたのだが、ここでの犧牲は決して小さいものではなかつた。後に毛澤東は「連合政府論」（一九四五年）の中で、第二次國內革命戰爭の始めのこの時期を概括して、「內戰が團結にとつてかわり、暗黑の中國が光明の中國にとつてかわつた。だが、中

國共產黨と中國人民は、おどかされも征服されもしなかつた。かれらは地面から立ちあがり、身體の血痕をぬぐいさり、仲間のしかばねを葬つて、再び闘いをつゞけた」と述べているが、これはこの時の困難の大きさを雄辯に語つている。壓迫されている人民のあるところでは決して闘いの火種が絶えてしまうことはない。中國革命は新しい情況の中で、新しい形で困難にたち向つていつた。だが、茅盾は「再び闘いつづける」ことはできなかつた。

彼は中學時代に、清朝が倒された辛亥革命を經驗しているが、そこで茅盾は革命に最大の期待をこめていた。今度の合作政府にはもつと大きな期待をかけていた。彼が生活した中國最大の都市上海では、勞働運動が高まりをみせ、それは彼の職場にまで及んできたのだつた。それにうちつゞく國共合作政府による北伐に全力を傾注するためにも、第一級の文藝批評家としての地位を投げ捨てたのであつた。複雜な嚴しい社會變革のための闘爭を彼はどうとらえたか。それは彼自身のことばがそのとらえ方を明らかに示しているように、「矛盾」の渦であつたのだ。そしてそれは決してなまやさしいものではなかつた。その矛盾の渦が長からぬ時期に繰り返し色々な事件となつて彼に迫つてきた。茅盾はこの渦の本質を見拔き、この一時的な革命情勢の後退を理解することができなかつたのだ。渦をつきつめてはつきりさせ新たな闘いの方向を模索することは彼にはできなかつた。彼が早くから接したマルクス主義者や上海大學などでの影響、彼が讀んだ書物からの知識も、現實の複雜なきびしい闘爭の中で生かされ發展させられることはなかつた。ここに茅盾のこの當時の限界があつた。ただここで注意しておかなくてはならないのは、茅盾の革命闘爭への參加は、結果においては挫折に終つてしまつたけれども、彼の思想形成の上では大きな位置を占めるものであるという點である。

茅盾の小説作家としての出發點が、ほかでもなくこの時期にあつたことは、彼の文學の方向を決定づけるかなり大きな要因になつていると思う。つまり彼の處女作「蝕」にみられる文學の方向は、長所も短所も含めて、彼のそれまでの社會的實踐と結びついているのである。「中國の社會を描く」といういわば茅盾の唯一のテーマが、ここに出發しており、以後の「子夜」「林家鋪子」「腐蝕」「霜葉紅似二月花」にくりひろげられる中國現代社會をとらえるという課題が、この

北伐革命の實踐によつてその第一歩として印されたことは注意されなければならない。

三

茅盾は、一九二七年の八月には上海にもどり、二、三年來書きたいと思つていた人物像・社會の激動を追想の氣分をこめて書いた。これが後に「蝕」三部作にまとめられた「幻滅」「動搖」「追求」であつた。この頃彼は、外界と全く交渉のない狀況の中でこれらを書いたという。「前後十カ月私は自分の大門から出なかつた。とりわけ『幻滅』と『動搖』を書く時はたずねてくる友人もほとんどいなかつた。その頃四、五人の家の人以外、私と世の中とは完全に隔絶されていた。私は『追憶』の氣分で『幻滅』と『動搖』を書いたのである」(一九二八年「牯嶺から東京へ」)このように茅盾自身「追憶」ということばをつかつているように、彼が實際に參加した合作政府の時期と、それが挫折した後の上海・武漢を舞臺にした物語りがこれらの小說であつた。これを書く時茅盾は、「個人の主觀を混ぜないで、『幻滅』と『動搖』中の人物が、革命にどう對處したかという客觀的情勢に合わせるようにした」(「牯嶺から東京へ」)といつているが、このように述べたのは茅盾自身のまぎれもない主觀であり、この彼の「個人の主觀をまぜないで」という辯明とは逆に、「蝕」の中には當時の茅盾の思想がはつきりと表われている。

まず「幻滅」についてそれを檢討してみよう。この作品が描いているのは一九二六年から翌年にかけての時、上海、武漢、牯嶺という場——これらは茅盾が二六年から二七年にかけて動いていつた軌跡であるが、——における青年像と、それを通しての革命情勢である。青年といつても學生と學生あがりのインテリ青年であり、當時の中國の青年全體という視點からのとらえ方では勿論ない。いまここで主人公の女子學生靜の描かれ方を追つてゆこう。彼女は現在は上海での大學生生活を送つており、すべての情熱を學問にうちこんでおり、ほかの事には目をくれないでいようと努力するのだが、實はこれは彼女がかつて中學時代に學生運動に情熱を傾けたことの反動であつたのだ。彼女がふとしたことから心を許すようになつた學友抱素は、ニヒリストを裝つていたが、實は學生運動をスパイする學生の裏切り者であつた。この事を知つ

て靜は大打擊を受け、そのために病氣になつてしまい、しばらく學校を離れて入院生活を送る。しかし醫者・學友の慰めと勵ましとによつて次第に病も回復し、元氣をとりもどして、ただ自分だけの將來のためを考えるだけの、學問一本に眼を注ぐという考えを改めて、中國全體をみたとき現在最も緊急な國共合作政府に自分の能力と情熱とを獻げる決意をもつて武漢に赴く。武漢政府は中國の革命をおしすゝめてゆくための中心機關であつた。彼女は大きな期待をもつてこの武漢政府にやつてきたのだが、ここでの生活はすべて彼女の期待を裏切るものであつた。初めの三週間の政治工作で失望し、次の婦女會の仕事でも幻滅を感じ、つづいて省工會での仕事も彼女を滿足させはしなかつた。彼女は度重なる失望の中で再び病氣になつてしまう。この時も學生時代の友人の援助に支えられて立ちなおり、北伐の戰いで負傷した兵士の役に立ちたいと看護婦として働こうと思いたつ。看護婦として働らく中で一人の青年兵士惟力と戀をするようになり、彼女の情熱はすべて惟力への愛に集中された。惟力は負傷して入院していた。その後傷が治ると二人は牯嶺に旅行するのであるがこの幸福の絶頂もすぐにこわされてしまつた。惟力に電報がきて彼が部隊に呼びもどされてしまつたのだつた。靜の前にはまたまた幻滅が迫つてきた。

以上が靜を中心にして見た「幻滅」の描いているものである。「幻滅」を書いた一年後にこう述べている。「ゾラは小説を書こうとして人生を經驗した。トルストイは人生を經驗してから小説を書いたということばがあるが、自分が小説を書いてみたらトルストイに近くなつてしまつた」と。さらに茅盾は、世人が彼のことを自然主義の信徒であるから、ゾラ式に藝術のために社會實踐に入つていつたのだろうという人もいるが、「私は小説を書こうとして人生を經驗したのではない」と語つている。つまり、茅盾の文學の出發點は先に述べたように人生を經驗したことの中から始まつたものであり、とりわけ二五年から二七年の中國を大きく搖り動かした國共合作政府での活動と切り離して考えることのできないものである。この作品が描いている變革の時代に青年はどう生きようとしたのかという問題は、現在の歴史的評價を加えれば、もちろん完璧に處理されているとは言えないが、もし茅盾が實踐の鬪爭の中に入つてゆかなかつたら、決してこのよ

うにとり上げることはできなかつただろうと思う。

主人公靜は上海の大學では社會に眼を閉じ、學問だけの中に沈潛しようとしてみるが、それにも徹底できない。同學抱素の卑劣さの發見とそれによる衝擊、再び元氣をとり返して武漢政府での活動とその幻滅、惟力との戀愛と別れというように波をなして現われてくる期待と挫折には、小資產階級インテリの生活態度、社會に對する態度、革命に對する態度の特徵がよく表われている。このようにこの作品が、大革命時代の社會の雰圍氣を傳えているとはいえ、その時代を全面的に反映しているとは言いがたい點がある。つまり北伐などの過程で、中國の社會の根底をしつかりと支え、搾取され壓迫されていた農民、目覺めつゝあつた都市の勞働者がこの社會變革をどううけとめていたのかに思いをいたす視點が全く缺落していたという點である。もちろん一つの作品にすべての社會層とその人物を登場させて、それが有機的に關係づけられるということが必要であつたというのではない。小資產階級インテリを描くにしても、社會全體を把える視點をもつてすれば有效に描くことができるだろうから。解放後の作品で北伐時期を扱つた長編小說「前驅」（陳立德作—一九六四年作家出版社）で、茅盾の「幻滅」が描いているものを全く新しい角度から、描きだしている。この小說の主人公である貧農の子萬先廷からみた北伐と、「幻滅」の靜からみた北伐とをくらべてみると、現在の評價として「幻滅」の弱さは覆うべくもない。「前驅」では貧しい家庭に育つた萬先廷にとつては北伐軍がわが家であり、そこで革命の先輩に育てられたのだつた。茅盾がこれらの勞農下層民をとらえ描くことができなかつたのは、時代的な制約があつた事によるのは言うまでもないが、その外茅盾自身の革命に悲觀した氣持がそうさせたということも確かである。それは彼が「私は正直なことをいおう、私には幻滅・悲觀・消沈の氣分」（「牯嶺から東京へ」）があつたと告白していることからも裏付けられる。「幻滅」の主人公靜の意識を期待とその破滅を折り重ねながらもついに幻滅に終らせてしまうようにさせたのは、茅盾自身の現實に對する幻滅感に外ならないのである。

「幻滅」につづく「動搖」は、「幻滅」とは時も所も異なり、二七年一月から五月にかけての湖北省の長江の上海のあ

る縣城における物語りである。この作品では特に主人公といえるものはなく、ある縣城の革命情勢を描くという點にポイントが置かれている。革命をすゝめる國民黨とそのまわりにいる人々、その中にまぎれこみ生きのびようと畫策してある程度の成功を收める土豪劣紳、縣城の商店員のストライキ、附近の農村では農民協會に組織された農民のめざめ、農民と商店員が力を合わせて反動勢力と闘かうという場面等が描き出されている。この作品について茅盾は「人物はもちろん虚構であり、事實もすべて眞實ではない。しかしその中のいくつかの重要な事實は當時私が得た發表できなかつたニュース・ルポによつている」（「牯嶺から東京へ」）と語つているように、彼が民國日報の編集主任をしている時に耳にした現實のニュースが活用されているのである。

この作品では當時の湖北省の一縣城の時代の氣分がかなり多面的に描き出されていて、この三部作のうちでもいくつかの優れた場面（たとえば第八章に見られる農村の表現など）を多く持つている。だが小説の構成という面ではあまりうまくいつているとはいえない。たとえば第五章及び第九章にみられる方羅蘭とその妻との間の葛藤が、この作品の中で浮いているように思われる。そして最後の場面にも、この妻との不安定な感情をもつてきているが、これも全體の中でみると違和感を覺える。

第三の「追求」は何を描いているか。一口にいえば、これは大革命の挫折後、この大革命に期待をかけていた青年がどんな考えを持ちどう生活するようになつたかを描いているといえよう。一年前には滿腔の情熱をかたむけて、學生生活を振り切つて革命に參加した張曼青は革命の挫折による悲哀を感じて再び上海に戻つてきて、今度は教育によつて國を救おうという目標をもつてその道を歩む。王仲昭は、この暗黑な世にあつても良心的な新聞記者たるべくつとめ、新聞社がまじめに社會問題をとり上げたり、有能な記者を採用すべきことを建議する。同じく同級生の史循は極端な厭世主義者でありはじめは自殺にも失敗するが後に暴飲暴食のあげく死んでしまう。結局張曼青の教育救國の願いも、王仲昭の新聞記者として立派に生きようとする追求も却つて冷やかに遇され、皆最後には失望してしまう。作者はこの小説の終りに近い

部分でこう書いている。「彼らは皆一生縣命何かを追求した。彼らにはそれぞれの憧憬があつたのだが、彼らは皆失望した。彼らの個性、思想は皆異つているが同じように失望したのだ！　運命の權威、これが運命の權威なのだろうか？　現代の悲哀というのはこのようにさけられないものだろうか？」

この作品は大革命挫折後の青年の追求を描いたものであるが、それにしても追求して得られた成果といえるようなものは何一つ見あたらない。まじめに教育によつて中國をよくしようという願望、新聞によつて社會正義を貫こうという願いもすぐ挫折してしまう。ニヒリストは自殺に失敗するが後に若くして死んでしまう。他に近代的自我に眼ざめた女性も生きゆくべき方向が見出せないまゝ自棄的な日々を送つている。全く方向の見出しえない作品である。この「追求」は二八年のはじめに書かれたものであり、茅盾の氣分・思想のもつとも濃厚に反映している點で「蝕」三部作のしめくくりにふさわしいとはいえるけれど。

以上みてきたことから明らかなように茅盾の作家としての出發點「蝕」において、作品の中に表わしているのは現實の中國社會に對する幻滅であり、社會が變つてゆくであろうし、變えてゆく爲に自分の力を注がなくてはならないという確信の動搖であり、このような幻滅・動搖の上にたつて追求のために主觀的には努力してみても、その追求からは決して何ものも獲得することはできなかつたということである。彼がいずれにせよ現實の鬪爭と離れた所にいて、つまり「家の中にとじこもつて」、「人ともあわずに」、「追憶の氣分」で書いたものであり、從つて現實の生きた社會との間にづれをもたらすものになつてしまつたのである。このことは日本滯在中に書かれた「虹」についても言える。日本から歸つてからの成功作「子夜」「林家鋪子」農村三部作などの作品がこれとは逆に、公債市場、工場經營者を訪れてその實狀をふまえたのとひきくらべてみてもこのことがいえる。つまり現實の社會とその鬪爭を描くのに、もしそこから離れて書こうとすれば、それは決して成功したものにはなりえないだろうということを示している。また一面、この時期つまり二七年四月を境にしてこれ以後の時期は、現代史を全體として眺めてみても氣づくように革命情勢の最も困難な時期にあたつているこ

とも含めて茅盾を考えねばなるまい。毛澤東も「井崗山の鬪爭」（一九二八年）で「一年このかた各地に轉戰してみて、全國的な革命の波が退潮したことを深く感じている。……われわれは寂しさを感じる。われわれはこのような寂しい生活が終ることを一ときも望んでいない時はない」とこの期をふり返つているほどである。茅盾の「蝕」は中國の革命に對する挫折をとり上げた文學であると概括することができるが、この茅盾の挫折も茅盾自らの社會的實踐の中において經驗したものであつたし、後の飛躍への前夜であつたのだという點を注意しておきたい。

茅盾の作家としての出發はこうして行なわれ、日本滯在期につゞいて、左連の中で成長をとげ、抗日戰の時期は魯迅なきあとの文化界において中心的な活躍をし、解放後は文化界の行政指導の面で大きな貢獻を果している。本年七一歳に至るまでの生涯は決して一直線といえるものではないけれども、彼の歩んできた道からわれわれのくみとるべきものは多い。

（大學院修士課程卒）